

「教科書体活字の字形について」

周 東 清 芳

1

一九四七（昭和二二）年国語審議会は『義務教育用漢字』八
八一字を選定し、翌一九四八（昭和二三）年『当用漢字字体
表』を答申した。それから十年後の一九五八（昭和二三）年、
文部省初等中等教育局長通知『教科用図書検定基準内規』に
よっていわゆる「許容体」を認めた上で「教科書体活字」を統
一する方向を見せ、一九七七（昭和五二）年の『小学校学習指
導要領』にそって作られる教科書から、教科書会社各社とも統
一された字体を使用することになって、『常用漢字表』に代
わった今日に至っている。

この「教科書体活字」の雛形は『小学校学習指導要領』の別
表の『学年別漢字配当表』の活字になるのだろう。平成四年実
施の学習指導要領では一〇〇六字になっているが、活字の字形
には何の変化もない。また、書写の教科書の手書きの文字（手
本）も、六年生用の一部でいわゆる「許容体」に触れるだけで、
大半は教科書体のおりに書かれている。たしかに「教科書体

活字」は大半が「明朝体活字」よりも手書きをするのに適した
字形になってはいるが、整形・速書などの点からみると必ずし
もよいものとはいえない。

『常用六体辞典』（ぎょうせい）の「標準教育書体」の解説に
も書いておいたが、初唐の楷書の古典と比較すると「教科書
体」には手書きに向いていない要素が多く見られる。書写教育
関係の著書を拝見すると、小学校でまず「教科書体」を習い、
中学校以降で「書写体」（許容体）などを学習するといよいよに
書かれている。本来、文字は手で書かれたもので、手書き文字
は活字の字形から制約をうける必要などないものであるから、
最初から行書に移行しやすい字形を「教科書体」とすればよい
のである。

中には「明朝体」のほうが「教科書体」より手書きに向いて
いるもの（園・恩など）もあるが、教科書の執筆者は書道の達
人ばかりであるから、なんとか形にしてみよう。しかし小中学
生に離れ業を要求するのは酷であろう。まして、ワープロやパ
ソコンが普及してきている時代に、同じ楷書を二種類も習いた

い子供がいるだろうか。また、週休二日制に移行し教育内容の精選が叫ばれている時代でもある。文部省をはじめ関係者は、「教科書体」をその作成の基本に戻って見直すべきではなからうか。

本稿では、「教科書体活字」の字形について、速書きするのに適さない字形（点画）を中心に考察し分類して、簡単な根拠と書き改めたその形を示すが、同一の文字でも違う要素がある場合はそれぞれの項に示すこととする。なお、紙面の都合で字源的な要素にはあまり触れられないが、『常用漢字表』の字体・字形そのものについて根本的な見直しが必要と思われる方は、『字源辞典』（角川書店）・『漢字類編』（木耳社）や『常用漢字字体考』（上田女子短期大学紀要）等をご覧いただきたい。

2

I 一画のみの変形

一 「縦画」の変形

① 「短い縦画」を「点」（左上から右下）に変形。字源（小篆以前）を調べると、「短い縦画」・「短い横画」・「貫く縦画」などが考えられるが、「点」に統一してよいと思われる。

安	意	宇
案	育	液
案	育	液
暗	院	演
暗	院	演
位	飲	応
位	飲	応

億	割	管	旗	宮	競	穴	交	康	濟	市	識	宗	熟	障	新
億	割	管	旗	宮	競	穴	交	康	濟	市	識	宗	熟	障	新
音	完	館	客	京	空	憲	校	鉦	裁	姉	室	就	序	食	親
音	完	館	客	京	空	憲	校	鉦	裁	姉	室	就	序	食	親
害	官	顔	究	境	景	庫	航	刻	察	字	実	宿	商	織	製
害	官	顔	究	境	景	庫	航	刻	察	字	実	宿	商	織	製
扌	寒	寄	泣	鏡	激	広	高	座	産	辞	守	縮	章	職	席
扌	寒	寄	泣	鏡	激	広	高	座	産	辞	守	縮	章	職	席

二 「横画」の変形

(一三一字)

良	裏	遊	防	放	文	病	年	度	停	庁	対	装	接
良	裏	遊	防	放	文	病	年	度	停	庁	対	装	接
朗	立	容	望	訪	変	府	肺	統	適	痛	宅	族	宣
朗	立	容	望	訪	変	府	肺	統	適	痛	宅	族	宣
六	流	養	密	亡	方	富	倍	糖	敵	定	宙	卒	船
六	流	養	密	亡	方	富	倍	糖	敵	定	宙	卒	船
	旅	翌	夜	忘	宝	部	飯	童	店	底	貯	率	窓
	旅	翌	夜	忘	宝	部	飯	童	店	底	貯	率	窓

② 「横画」を「点」(左上から右下)に変形。字源的には「横画」だが、①同様に「点」に統一する。

三 「右払い」の変形

⑤ 「右払い」を「点」(左上から右下)に変形。狭いところを広げたり、長く強調する画を一本にしたりする。

養	総	康	険	外	映	医
養	総	康	険	外	映	医
緑	談	姿	検	閣	園	委
緑	談	姿	検	閣	園	委
録	美	食	験	求	央	因
録	美	食	験	求	央	因
	返	森	困	球	恩	英
	返	森	困	球	恩	英

(二七字)

戸	所	倉	創
戸	所	倉	創
編	編		
編	編		

(五字)

③ 「横画」(止め)を「払い」(左下から右上)に変形。右辺の上部に運動が連続するので、払い上げる。

印	街	功
印	街	功

(三字)

④ 「横画」(縦画が右に折れたのち止め)を「払い」に変形。③と同じ道理。

断
断

(一字)

⑥ 「払い」(左下から右上)を「点」(左上から右下)に変形。最終画もしくは左下に運動が連続する画であるから、払い上げるのは不自然。

羽 羽 均 弱 習
 翬 翬 均 弱 習
 (五字)

四 「曲がり」の変形

⑦ 「曲がり」を「点」(左上から右下)に変形。左下に運動が連続するし空間がゆったりするので変形させたほうがよい。

究 空 商 深
 勢 窓 探 熱
 陸 陸
 (九字)

⑧ 「曲がって止め」を「折れて払い」に変形。右辺の上部に運動が連続するし、「曲がり」より「折れ」のほうが直線的で速く書ける。

改 改 切 切 望 望
 (三字)

五 「折れ」の変形

⑨ 「折れ」を「直線」(横画の止め)に変形する。全体もしくは部分の縦の中心線がとりやすくなり、左側の空間がゆったりする。「県」以外は字源的には「折れ」が正しいが、書きやすいほうに統一する。

県 県 値 置 直
 (四字)

六 「左払い」の変形

⑩ 「左払い」を「横画」(止め)に変形。上下の間隔をとりやすくするために「横画」にする。

考 考 純 風 風
 (三字)

七 斜画の「止め」の変形

⑪ 斜画の「止め」を「払い」に変形。最終画か左下に運動が連続していく画なので、「払い」のほうが自然。

今 今 念 念
 (二字)

八 「はね」の変形

⑫ 「折れて曲がってはね」を「折れて払い」に変形。

包 包 望 望
 (二字)

Ⅱ 部分(二画以上のまとまり)の変形

⑬ 「左払い・はね」を「横画・止め」に変形。同形の重複を避け、引き締める。

疑 疑 態 態 能 能
 (三字)

⑭ 「左払い・曲がり」を「縦画二本(止め・払い)」に変形。狭い部分で曲げるのは窮屈であり、行書ではまず曲げない。契文・金文の字形も「縦画」二本となっている。

酸 四 酒 西
酸 四 酒 西

尊 配
尊 配
(六字)

⑮ 「木」を「ホ」に変形。「木」の一画目または別の「横画」を長くして強調するので、二画目以降を変形して「ホ」の形にする。

案 案 案 案
案 案 案 案
案 案 案 案
案 案 案 案
(八字)

⑯ 「糸」の下部を「点」三つに変形。行書への移行が楽になる。

紀 級 給 経
紀 級 給 経
紀 級 給 経
紀 級 給 経
(二四字)

⑰ 「隹」の右上部を「羽」の変形に。字源を考えても、もともとこの部分は「羽」であるから、もとの形に戻し最終画を「点」にする。

曜 曜
(二字)

⑱ 「己」の変形。狭い部分であることと運動の連続を考える。

選 選
(一字)

3

以上示したように、選定された『義務教育用漢字』（教育漢字）の活字（教科書体活字）の一部は手書きのためのものにはなっていないことがわかる。当時の文部省の担当者や関係者が、どのような思想のもとにどのような経緯で決定したのかは、資料を見ていないのでよくわからないが、書写教育の現場の教員たちからみて、絶えず批判されてきたことによっても明らかだろう。

はじめに少々述べたように、点画や部分の細かい違いよりも、字源や略し方の正誤や適不適から見直さなければ「漢字」の字体や字形の問題は解決しない。趣味や金儲けとしての書道がどれほど盛んになっても、義務教育の現場で、合理的で歴史的にも正しい漢字や書写の教育がなされなければ、確実な文字文化の継承は望めないだろう。

本家の中国では一九五六年から数度にわたり簡体字を公布し、その一部に字源に溯る改革が見られる。また、教科書会社のM社は、昭和六十二年度用からの教科用図書（教科書）のために「糸」編の活字を改鋳した。六画の文字が八画に見えていたの

を作り直したもののだが、当時中学校の国語科を担当していた私にとっては、とても有り難いことであった。最近各社のワープロやパソコンがさまざまな書風（字形）の文字を内蔵するようになってきているが、『常用漢字字体表』や『学年別漢字配当表』は依然として変わっていないのである。一日も早く信頼のおける専門委員会に諮問して、正しく書きやすい字体を制定してほしいものである。

なお、この文章を書き終えてから『書道研究』五四号を手にしたら、福岡教育大の阿保直彦氏が「教科書体活字の実態と、その考察」という文章を発表されていた。多角的に考察されているので、大いに参考していただきたい。

〔主要参考文献〕

- ・『書道字典』（伏見冲敬編、角川書店）
- ・『角川字源辞典』（加藤常賢他著、角川書店）
- ・『漢字類編』（小林 博編、木耳社）
- ・『書写書道用語辞典』（藤原 宏他編、第一法規）
- ・『書写書道教育史資料』（加藤達成監修、東京法令出版）
- ・『書写指導（中学校編）』（全国大学書写書道教育学会編、萱原書房）
- ・『漢字の知恵』（藤堂明保著、徳間文庫）
- ・『漢字入門』（杉本つとむ編著、早大出版部）
- ・『教養の漢字学』（阿辻哲次著、大修館）
- ・『図説漢字の歴史』（阿辻哲次著、大修館）
- ・『文字の書き方』（氷田光風他著、講談社学術文庫）

- ・『書道研究（五十三号）』（萱原 晋編、萱原書房）
- ・『しにか（一九九〇年十月号）』（しにか編集室編、大修館）